

庭の岩清水

岸村茂雄



ぼた ぼた ぼた ぼたぼたぼた
春を告げる軒端の歌——

造林小屋を取巻く落葉松林の枝と
いう枝には、緑の芽の赤ん坊が可愛いく頭
を出しならべ、陽当りの斜面では、カタク
リの花がピッショリぬれたように咲いてい
た。

昨日は、溪の方で駒鳥の歌を聞いた。

今朝早く、南面の尾根までのはつて採集
してきた、オオバコの若葉をフライパンで
焙めたら、眼にみる緑だった。

……その頃の私は、豆もやしのように
ひよわで、何時も人のいない日蔭を好ん
で、そこで自分自身の心をいじめ、それを
たのしんでいるような少年だった。或る
日、ひつそりした縁側の片隅で、鏡に顔を
そつと映してみた。鼠のようにおどおどし
た眼、黄色くぶくぶくした皮膚、醜い顔——
たまらなく自分自身が嫌になつて、ルック
を背負うと数冊の本を持つて、溪間の無人
の造林小屋へ入つて行つた。

……それは、霧の中で人をさがすよ
うに、遠い日のおぼろな記憶である。
その時も、わたくしは、造林小屋の窓か
ら軒端のつららを見上げていた。

求めて、そこに住んだなら、私の醜さの中
からも幾らかの素直な美しさが生れるので
はないか。心が美しくなつたなら、顔も美
しくなつてくる、と、信じたようであつ
た。

(山と山とが相せまり、せまりせまつて、
そこにかすかに水が流れる……)——牧水
の歌が一直線に私に呼びかけてきた。

……丁度、小屋に来てから二十日目。
溪間から、水音がとどいてきた。

それは、水の音というのではなく、春に
甦つた山の音なのか知れない。
それを聞いてみると、私の鼓動も高鳴り
をはじめてきて、かたくなな心が次第に解
けはじめたようであつた。

私はその水が見たくなつた。
山靴をつつかけると紐も結ばずに溪の方
に駆けだした。

……とくとくとの岩清水の附近には、エ
イザンズミレが咲いていて、岩場からはテ
ンが顔を出して私をのぞき込んだ。

私の頬は、ひとりではころんできて、
大地に倒れると、水に顔をつけてのんだ。
やがて、冷たさが全身を支配してきて、
水鏡の中の顔は花が開いてくるように笑

いかけてきた。もうあんなじめじめした顔
でなく、明るい顔になれるような気がして
くる。

私は、半裸になると、冷たい水で体をゴ
シゴシ拭きはじめた。

造林小屋まで駆け上つて、榾火を踏み消
してルックを背負うと、溪にそつて山を馳
け下りはじめた。……)

私と云う少年は、その時にとくとくの水
から大地の愛の歌を聞いたようであつた。

田舎で育つた人なら誰にも、清水に連な
る思い出があるに違いない。

何故、わたくし達は、とくとくとの岩清水
を恋うのであろうか。そこに心のふるさと
を感じるのだろうか。私達が大きな貯水池
の水よりも、むしろとくとくの水滴により
愛着を覚えるのは何故なのだろう。

それは、山肌から生れ落ちる、一滴一滴に、
本能の喜びを感じるからではないか。

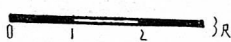
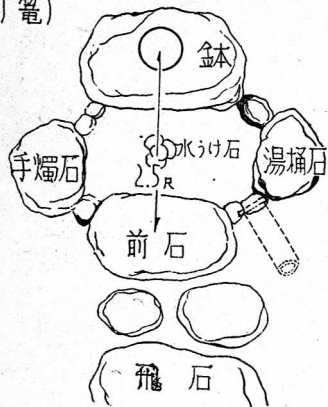
生れ出た喜び！ 大地から生きてきた表
現！ それを本能的に感ずるからに違いな
い。

庭園に於けるとくとくの水の表現法に
は、いろいろあるが、その一番形式化した
ものは茶庭の踏躰フミタであろう。このきまりき
つた型を破ろうと、今日までいろいろな
技法が行われてきていたが、型を破つた良
いものは案外に少ない。

そこで、私は、農家の庭先や、村落の路
傍の水の湧いている個処に、日本的なよき

第一図

(灯笼)



実線は手燭石、点線は湯桶石

をあなたの手で作つて頂くために、はじめに蹲踞の型について述べ、それから応用出来るであろう一、二の例をあげてみた。そこがあなたの心の憩い場となるよう。そして、あなたの子供達がそこから大地のうたを聞くように。
日本庭園の蹲踞

庭に水を使うことの意味は、元来が静かなものである庭に動きを与えるためと、又、逆に、静かな庭により奥深い静かさを表現するためにである。殊に狭い庭をいきいきと表現する場合には、一本の筧から落ちる水の効果は大きい。
そして、庭における水の表現の大切な勘どころは次の二つにつきると思う。
(一) 見る人の空想の中に水流が構成されるよう表現すること。
日本庭園では、室町時代から枯山水という手法が行われてきていて、水を使わずに水を表現しようとした。京都に行かれた人の中には、苔寺の名で知られている松尾の西芳寺、その開山堂(指東庵)の前の石組に感激した経験があるに違いない。
あの前にひとり坐していると、その石組の中から、とうとうと人を押倒す水勢が湧き起つてくる。恐しくなつて、長くその前に坐していることが出来ない程だ。もし、実際の水を使つたならあのすさまじさはあの面積には表現出来ぬであろう。水を使わぬために、かえつて水以上のものが表現出来ることは、日本庭園の技法のうちで世界に誇り得るもの一つである。実際作者は自覚していないであろうが、水を用いたために、かえつて庭の風趣を害し、庭の幽玄な静寂を破つた例が多い。筧のとくとくの清水でも、しぼり落ちる感じが大切で、流しては表現が浅くなる。

小住宅の庭に水を使う場合、水量は出来るだけ少なくして、空想の中の自由な水の表現ということ忘れてはならない。
(二) 水よりも岩組に心を配ることが大切である。
結局、水の表現は岩組の表現で、点景が水と云えよう。
庭の蹲踞の石組は、手水鉢、手水を使う時に乗る前石、夜の使用の時に手燭を乗せる湯桶石、厳冬に使う場合に湯桶を乗せる湯桶石からなる。その高さや寸法についてはいろいろ云われているが、第一図によつて大体を掴んで頂きたい。構成上の注意としては利久の書の中にも、「客が心をかけて見るべきもの」として、捨石、飛石と共にこの前石があげられているが、前石には特に良い石を選ぶことが大切で、据える場合も飛石より一〜二寸高く据えることよい。尚、普通、蹲踞附近には幽寂の感じを出すために下草を配し、灯笼は、手水を使う時に手暗がりにならぬよう、向つて左奥に据える。
以上を基礎知識として、農家の庭先に応用出来る一、二例を上げてみよう。

第一例

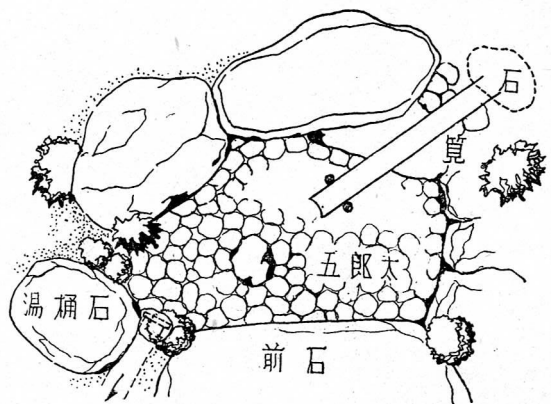
裏山のしぼり水を筧でうけて、斜面寄りに作つた蹲踞。

水源からの距離が遠い場合は、長い樋で水を引く。この際、樋は

第一例 (2)



第一例 (1)



灌木でかくすか、見せるにしても途中の一個所位でわずかにのぞかせる方が無難であろう。山際には、かなり大きな石を乱積みとして土止めにした。目地は苔目地（目地に土をバリか小棒でしつかり突込んで、その上に苔を目地鏝で押しつけるようにして張る）として、山草をあしらう。右手の斜面寄りに比較的大きな石を使つたから、左の方はあつさりとして逃げて、苔を一面に張つた平坦地とするがよい。

第二例(1)

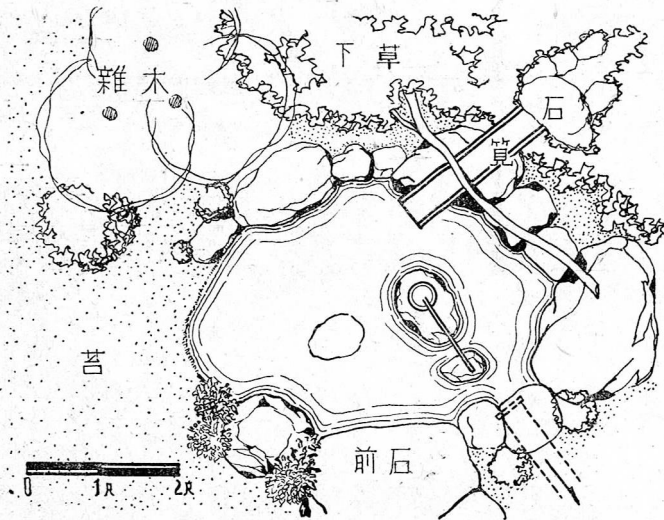


のであるが、地鏝は植木職でないも持たないから、煉瓦鏝を代用すればよい。播き苔といつて、苔を両手でもむようにしてばらばらほぐし、粘質土と混ぜて地面に播き、地鏝で叩いてゆく方法もある。

役石は、前石と湯桶石だけにしたが、湯桶石を用いずに、竹の簀子の台を作つて關枷棚とし、右手なり左手なりに置き、徒然草の感じを出すのもよい。

前石と寛との距離が遠い場合には、沢飛び式に海の中に一個の飛石をあしらつてもよい。寛には、山中で自然に腐つた大木の材部をはがしたものを使つた。

第二例(2)



第二例

これは、村落の路傍などの、清冽で比較的水量の多く得られる場所を対象とした。おり蹲踞といつて、蹲踞を一段と低いところに作り、二、三段飛石を下つて前石に到るようにし、立体的な感じを出した。何時も水がはけるように、土管で排水をとることを考えなければならぬ。水中に配した二、三個の石は、その高低を同じにせず、一個位は水中に眺めるようにしたい。

寛は、貫を三枚打合せた大味のものが返つてよいであろう。寛の上に横に渡してある雑木の枝は、厳冬の頃に葉か杉皮をこの

枝に渡しさせて、覆うと云う感じを出したつもりだが、どうであろう。

小型の灯笼があれば埋込みとして左手に使うとよい。

最後に、蹲踞を設ける位置であるが、元来が小味なものであるから、出来得れば座敷近く引きよせて景の中心とするのがよく、広い庭なら蹲踞のバックを低い生垣で仕切るかして小さなまとまりをつけるとうい。とも待ち、あづまの附近に用いてもよい。

座敷にひとり坐して、滴々の水を見ているのは快く、人を訪問して待たされる場合などこれを見ていると、時のたつのも惜しまれる。

湧き出する水。

それは、生れ出するものに対する私達の本能的な喜びに通じるものなのであろうか。生きとし生けるものもつ、純粋な喜びなのであろうか。

それならば

「とくとくの落つる岩間の苔清水
くみほすほどもなき住居かな」

と、泉を愛した西行の心は、次の時代を創る若い人達の心の中へ、永遠に流れてゆくことであろう。

(雪印種苗在勤)